

氏 名	ルアン ユン シン 阮 雲 星
学位の種類	博 士 (法 学)
学位記番号	法 博 第 45 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	法 学 研 究 科 基 礎 法 学 専 攻
学位論文題目	中国の宗族と政治文化 ——現代「義序」郷村の政治人類学的考察——

論文調査委員 (主 査) 教 授 木 村 雅 昭 教 授 寺 田 浩 明 教 授 大 嶽 秀 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代義序の宗族に関する政治人類学的モノグラフであると同時に、徳治政治文化の基層に関する一考察でもある。本論文は、1980年代以降再興されつつある宗族の実態を中心にして、前近代から現代までの宗族のありのままの姿を描き出すこと、およびそれを通じて従来の中国宗族研究及び中国基層政治文化・農村社会研究の中に含まれる人類学的・政治学的な諸問題、例えば宗族分節理論や、宗族における機能的側面と文化的側面との関係、徳治政治文化および現代農村政治構造と宗族との関係等に関する諸理論を再検証することを自らの課題とする。全体は序章と終章を除き、二部四章から構成されている。

序章では、1930年代になされた義序宗族についての林耀華の先駆的な実証研究、M. フリードマン以降の宗族についての人類学的な理論研究、および現代中国に関する政治学的研究の批判的検討に基づいて、政治構造と政治文化の基層のなかで宗族を捉え、また宗族のあり方の変化を政治構造・文化構造との関連で明らかにする為には、著者の言う「宗族風土論的」アプローチが必要となることが主張される。

第一部では、まず義序宗族の歴史的背景と文化的制度的基盤が検討される。

第一章では、宋代から清代までの義序宗族の形成過程を、中華帝国の支配体制と福建地域の社会風土と関連させながら、族譜などの第一次資料を用いて検討する。そこではまず宗族を支える文化的要素として、父系の系譜とそれをベースとする日常の村落生活、孝を中核とする儒学原理の科举を介しての浸透の重要性が指摘される。しかしその上で、実際の宗族の組織化にあたっては、土地を所有し且つ儒学原理を体現する郷紳層、さらには科举試験に合格した官吏達の能動的な役割が決定的であったことが指摘され、宗族が一方では日常的な生活意識に支えられつつも、他方では儒学に代表される高度文化や帝国支配体制に淵源する複合的な要因によって形成された制度であり、帝国支配体制が依拠した徳治主義の基底構造をなすものであったことが強調される。

第二章では、中華民国期の義序宗族と郷紳政治の実態が、先行する同時代的研究と著者自身の現地再調査に基づき、動態的に再構成される。そこではまず先行研究に基づき、宗族を構成する基本的な要素として、「三世代構成基本家族」・「五服内近親親族」・「五服外宗親」という概念が提示される。ついで史料および現地調査に基づき、家族や村落、地域で執り行なわれた数々の民俗儀礼・宗教儀礼の詳細な検討が行われ、宗族的支配の基礎にある文化的要因として、何であれ力あるものに対しては服従・祭祀・敬遠するという草の根の権威観、それを支える高度文化的要因としての徳の觀念の二つが抽出される。その上で民国期宗族の政治社会的な機能が検討され、当該時期には近代国家建設の過程で整備された郷会所や保甲制といった地方自治制度を通じて国家権力が村落社会に浸透し始めたにもかかわらず、そうした趨勢に触発されて却って郷紳支配が活性化の兆しを見せ始めたこと、その意味で民国時代の地方政治の実態は、伝統的な郷紳以外に中央権力との繋がりを有する新郷紳が台頭してきたとはいえ、なお地域の公共性に基づく権威と国家的行政権に由来する権威との間の顕著な「二重構造」を示すものであり、伝統と近代とが交錯する錯綜した様相を呈していたことが検証される。そして同時に中央

政権が抑圧的性格を強めるにつれ、徳に依拠して地方で名望を保つ伝統的な郷紳が政治の舞台から退場し、それに代わって土豪劣紳の人物が台頭してきたことに、政権の政治的正当性が堀り崩されてゆく構造的契機を見出している。

第二部では、第一部における歴史的検討を踏まえて、中華人民共和国期における宗族の盛衰と農村政治の構造変遷が検討される。

第三章では、まず1990年代における義序宗族の再興の歴史的背景を、集団化時代の「生産隊」の構造にまで遡って検討し、社会的統制集団化によってもたらされた閉鎖的農村の「自環節的生活共同体」こそがその基底要因であることを指摘する。またこれと併行して地域社会における「家族政治」の台頭過程が、二人の地方・基層エリートのライフヒストリーを通じて浮き彫りにされる。そこでは、全体主義的支配体制の下で「基層幹部」が体现する公共性の危機が深刻化していったこと、また度重なる政治運動と理想社会実現を目指す急進的な試みの出鱈目振りを痛感して挫折感や失望感を抱いた基層幹部たちが伝統的共同体に回帰していったことが、後の「家族資源」の浮上と「家族政治」の台頭の一因になったことが検証される。また同時に、基層幹部の思想と行動の詳細な検討を通じて、地域社会への配慮こそが基層幹部の政治的正当性を担保するものとして重視されていたことを検証し、そこに一族の排他的利益を追求せんとする態度を抑制する契機を見出すと同時に、あわせて伝統的儒教の文化的影響力の残存を確認する。

第四章では、再興された宗族の実態およびその村落政治上における役割が、現地での詳細な調査に基づいて構造的に分析され、以下の諸点が示される。まず第一に、改革開放政策以降、共産党権力が村落に対する直接支配から次第に身を引き、村落統治は村民委員会制度に委ねられるようになる。しかし、委員選挙が開始されたにもかかわらず、依然として共産党の間接的な支配が貫徹していた結果として、村民委員会はなお準行政的組織としての性格を兼ね備えていた。第二に、その裏側で、共産主義に代わる中華イデオロギーの台頭、海外華僑との交流、さらには国内の他の地域における同族との連携強化といった動きに触発されて、宗族意識が強化されていった。しかし第三に、そこに見える宗族組織のあり方は過去とは大きく異なっている。すなわち伝統的な宗族が名実共に地域社会の政治を担う自治的組織であったのに対して、今日の宗族は専ら族譜の編纂や祭祀の挙行を司る民間団体であり、また同姓不婚の原則がかつてほど厳格に履行されなくなったことに示されるように、宗族の規範にも弛緩がみられる。宗族は今や凝集性を喪失し、父系を共有するゆるやかなアイデンティティ集団として性格づけられる。ただその上で最後に、にもかかわらず宗族的な繋がりには村落政治での重要な政治的資源であり、しかも宗族のネットワークには共産党支配を換骨奪胎する契機が秘められていることが暗示される。

以上の考察を受けて終章では、中国史上観察される宗族現象を総括し、唐代までを「宗法・宗族」、宋代から清末までを「世族・士族宗族」、現代を「民間宗族」と規定する。あわせて現在、宗族が構造的には弛緩しているにもかかわらず、依然として社会の「古層」で生き続けていることを確認し、それが徳治政治文化の培養基として機能することによってむき出しの権力的契機を抑制する作用を果たす一方、権威主義的支配の文化的背景をなし、さらに政治腐敗の温床ともなっていることを指摘しつつ、現代中国における「市民的公共性」の構築可能性を模索することによって論述を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、在福州の義序村落における宗族の動向を政治文化論的考察を踏まえて検討することによって、中国政治の実態を明らかにせんとしたものである。

そもそも政治研究、就中、近代的要素と伝統的要素とが複雑に交錯する非西欧世界の政治研究において、政治と社会をつなぎ止め、政治権力をその根底において支える地域社会の政治エリートの役割は、決定的に重要であるものの、その動向を把握することは極めて困難である。その意味で本論文において広範な文献を渉猟する一方で、現地で度重なるフィールド・ワークを行ない、両者を有機的に組み合わせることによって、中国政治を草の根で支える宗族と、それに依拠した地方政治エリートの動向を明らかにしたことは、極めて高い学術的価値を有している。また著者は中国社会全体を鳥瞰するという方法を避け、対象を義序村落に限定し、聞き取り調査を交えてインテンシヴなりサーチを行っているが、こうした方法は政治研究の一つの有力な手法であると共に、文献調査だけではその実態を把握し難い地方の政治の実情を把握し、そこにおける地方政治エリートの動向を検討せんとする著者の目的に適合的なものである。

以上の観点から本論文の功績として評価すべきは、第三章・第四章において共産中国の地方の政治社会の実態を、宗族と

の関連で解明したことである。とくに共産政権成立後、農業集団化、人民公社化が遮二無二押し進められたにもかかわらず、そのことが逆説的に宗族組織の強化につながることを検証したことは、共産中国の政治の実態を草の根レベルで実証的に明らかにしたものである。すなわち人民公社化が自然村を基盤として行われ、且つそれが村外との物流を遮断したことによって却って村落の閉鎖性が高められ、その結果として一つの宗族が圧倒的な力を持つ義序のような村落では逆説的なことに宗族的結合が強化されたこと、また、苛烈な政治闘争と現実を無視した急進的な改革に翻弄された人々にとって、宗族が人々のセキュリティとアイデンティティの拠り所として機能し続けてきたこと、そして村落での政治の実権を掌握するにあたって宗族のネットワークが有効な政治資源であることを、具体的な事例研究に基づき跡付けたことは、いまなお謎に包まれた共産中国の政治の実態を抉りだしたものと高く評価されるべきものである。また著者が報告する二人の地方幹部のライフヒストリーには、宗族を含めて伝統的な制度・文化に苛烈な攻撃を加えた共産政府の試みにもかかわらず、社会の古層を形成するものとしての宗族とそれを支える社会・文化意識の強靱な生命力が生き生きと描かれている。

その一方で、以上のような過程で当の宗族組織が関することとなった歴史的変貌を明確に検証・指摘したことも、特筆に値するであろう。著者は、第一章において伝統的宗族結合の本質が父系的系譜を辿る祖先崇拜にあること、またそれが徳治主義的な国家統治原理と結びついて地方秩序の中核を担う現実的な組織を作り上げていたことを確認する。ところが現代においては、確かに共産主義イデオロギーに代わる中華イデオロギーの台頭や国内外同族との交流の活発化によって宗族意識が高揚し、また広範な領域の宗族成員が結集されることとなったが、それにもかかわらず祖先祭祀や族譜は必ずしも若者の関心を引きつけることがなく、また同姓不婚の原則も弛緩し、更には地方政治に対する宗族の関わりもインフォーマルなものに限定されている。この意味で昨今の中国における伝統の活性化には、近代的要素による伝統的要素の換骨奪胎の契機が秘められており、しかも当の政治活動を成功裡に行なうに際しては、近代教育を始め脱宗族的な資質が必要とされるのであれば、こうした換骨奪胎の過程は宗族の政治化と共に進展することになる。こうした現象を詳細に跡付けたことは、伝統と近代とが複雑に交錯する他の非西欧諸国の近代化の過程を考察する上でも貴重な示唆を与えるものといえよう。

このように著者は近代的な要素の伝統化、伝統的要素の近代化という二つのベクトルを、現代中国の基層政治の場で検証しているが、著者によれば同じ状況は既にして民国期にも現れていたと言う。第二章に示される民国期に関する著者の見解は、林耀華をはじめとする先行研究に多くを負っているが、ここでも国家権力の村落への浸透につれ、いうならばその反動として宗族意識が強化され、地方郷紳が地方政治の実権を掌握し続けていたことが、豊富な事例を踏まえて論証されている。その一方で村落への国家の介入が、「新郷紳」、すなわち国家権力との直接的な繋がりを有する人々の宗族内部での勢力拡大へと帰着していったことも、宗族そのものの構造変化を端緒的に示すものとみなすことができるであろう。

もっとも現代中国において血縁以外の社会的結合関係が機能していることは多くの研究によって確認されている。こうした状況は、著者が指摘するところの現代宗族の政治への関わりインフォーマル化の趨勢とパラレルに登場してくるものであるが、その実態が事例研究で必ずしも十分に分析されているわけではない。この意味で中国政治の基層を分析せんとする本論文には未だ検討すべき問題が残されているが、しかしこのことによって本論文の価値がいささかでも損なわれるものではない。いずれにせよ本論文において近・現代における宗族の動向が詳細に検証され、それとの関連で中国政治の実態が明らかにされたことは、第一級の学術的価値を有するものである。また、著者は、宗族が依拠する基本的な政治文化として徳治主義的政治文化を析出し、そこに権力的契機を抑制する作用を確認する一方、他面ではそれが権威主義的体制の政治文化的背景をなしていたことを、村落レベルの政治の分析を通して実証したことも評価されるべきである。

以上の点に鑑み、本論文は博士（法学）の学位を付与するにふさわしいものである。なお平成16年2月24日に調査委員3名が本論文に関する試問を行った結果、合格と認めた。